小学校地域学習におけるシビックプライド涵養に関する実践的研究

田中 尚人（熊本大学 政策創造研究教育センター，naotot@kumamoto-u.ac.jp）
堀尾 和美（熊本市立日吉東小学校，dee071769@sco.bbiq.jp）

Action research for cultivating civic pride in regional education of elementary school

Naoto Tanaka (Center for Policy Studies, Kumamoto University)
Kazumi Horio (Hiyoshi-higashi Elementary School)

要約

近年、地方創生や地域課題解決の文脈において、18 世紀にイギリスで生まれた「シビックプライド」の考え方が、公共空間デザインやまちづくりの現場においても注目されている。筆者らは、国内外の多様な社会科教育の実践を参照しつつ、従来の「公民的資質」との異同を探りながら、新しいカタチの小学校地域学習を実践するために、シビックプライドを「市民が地域社会に対してもつ自負と愛着、またその向上に対して積極的に参加する姿勢」と定義し、その教育意義、手法開発について研究している。本研究では、小学校の地域学習において「まち歩き」を基盤とした地域学習プログラムが、シビックプライド涵養に関して果たした役割について、アクションリサーチとして参与観察し、そのメカニズムを考察した。具体的には、熊本市立日吉東小学校 4 年生の社会科教育及び総合学習の時間を対象に、「まち探検」、「まち歩きマップづくり」、「交流会」という一連のプログラムについて、教材の作成や運営方法について実践及び検証を行った。研究の結果、ワークショップ的な授業を実施することで、地域らしさ（地域アイデンティティ）を自分事化し、物語として紡いで（協働して）いくプロセスを可視化することができ、児童が「地域社会」との結びつきを、クラスメイトとともにグループ学習を行って理解していく過程が、シビックプライドの涵養に効果的であることが考察できた。

キーワード

シビックプライド，地域学習，まちづくり，まち歩き，地域アイデンティティ

1. はじめに

1.1 研究の背景と目的

近年、縮小社会の到来、地方分権による都市間競争の発生により、地方創生や地域課題解決の文脈において、18 世紀にイギリスで生まれた「シビックプライド」（シビックプライド研究会，2008; 2015）の考え方が、公共空間デザインやまちづくりの現場でも注目されている。筆者らは、それぞれ地域学習に関連する専門性を有し、多様な専門家同士の協働のうえに、国内外の多様な教育実践を参照しつつ、従来の「公民的資質」との異同を探りながら、新しいカタチの小学校社会科地域学習を実践するために「シビックプライド教育研究会」を 2014 年 4 月に発足させた。

小学校社会科教育（「総合的な学習の時間」など関連も含む）には、地域住民、行政（教育委員会、県、市町村など）、地元企業、各種専門家など様々な立場の人々が関わっている。小学校学習指導要領において社会科は、「公民的資質の基礎」や「地域社会の一員としての自覚」を育むことを目標としている（文部科学省，2008）。このような学習目標の達成には、地域アイデンティティに触れ、様々なステークホルダーとの関係性を学ぶ「まちづくり」の学習が重要な働きをすると考えられる。

本研究では小学校社会科及び総合的な学習の時間（以下、総学と略）を対象に、プログラム全体の設計、「まち探検（まち歩き）」、「まち歩きマップ（まち歩きコース設定）」、「交流会（ワークショップ）」が、シビックプライド涵養に関して果たした役割について考察した。具体的には、小学校教諭との「まち歩き」を基盤とした、社会科教育と連動した総学の学習のプログラム、教材の作成や運営方法について、実践・検証を行った。

1.2 既往研究とシビックプライドの定義

伊藤らは、主に欧米での事例を取り上げ、シビックプライド（civic pride）は、「自分はこの都市を構成する一員でここをより良い場所にするために関わっているという意識を伴う。つまり、ある種の当事者意識に基づく自負心と言える」としている（文部科学省，2008）。

また、社会科教育の分野では、米国のサービスラーニングに詳しい唐木が、その著書にて「助け合って生きる社会」共生社会と「自治の精神」の宿る市民社会を迎え、イギリスのシティズンシップ教育や経済産業省が指し示した「社会人基礎力」などの影響もあり、子ども達が社会参加力を身につけること、「社会の形成に参画できる市民を育成するために、子どもの学びの場を教室から社会へ広げ、さまざまな意思決定の場に参加できる機会を子どもに保障していくことが必要である」としている（唐木，2008）。

そこで、筆者らは研究会にて、小学校地域学習を意識して、伊藤らのシビックプライドの定義をもとに、「市民が地域社会に対してもつ自負と愛着、またその向上に対

して積極的に参加する姿勢」と定義した。これにより、小学校社会科や総合学習の時間を主軸とした地域学習が、小学生の社会参加を促すようなシビックプライド涵養に繋が紙、そのプロセスを示すことができると考える。

2. 地域学習プログラムの設計

平成 26 年度は、筆者が前年度より協力体制にあった熊本市立日吉東小学校 4 年生担任の堀尾和美教諭とともに、３クラスに分かれている 4 年生の総学「未来へ～わたしたちのふるさと 日吉東～（70 時間）」及び社会科「郷土をひらく（13 時間）」の単元にて、シビックプライド涵養に繋がる教育プログラムの開発を試みた。

2.1 アドバイスの専門性について

具体的には、教材やまち歩き、マップづくりに対して、筆者が景観論や土木史、まちづくりに関する専門的知識を提供した。また、この授業を通して日吉東小学校が活動した成果は、日吉東小学校が立地し、筆者がまちづくり懇話会会長を務める熊本市南区のまちづくり施策に、実際に活用された。 筆者が意識した、専門的知識の提供の観点を、以下に 3 点示した。

(1) 景観論：主に「まち歩き」から「マップづくり」へと繋がるプログラム作成に対して、地域景観の成り立ちを理解するために文化的景観の概念を説明し、目に見えるものも、見えないものも地図に表現した。
(2) 土木史：校区を流れる三の井手の由来や、土木技術の発展とともに川や道路などインフラストラクチャー、生活環境が変容してきたことを解説した。
※「三の井手」とは、白川から取水し、白川の左岸の耕作地帯（右岸は熊本城の城下町）を潤すために、加藤清正が築造させた農業用水路「大井手」から分水される支線である。
(3) まちづくり：ワークショップのデザイン手法（美馬・山内，2005; 山内他，2013）の他、「まち歩きはまちづくり」という茶谷が提唱するまち歩き（茶谷，2012）や、美里町方式と言われるフットパス（神谷，2014）など多様な主体が協働する手法を導入した。

2.2 教育プログラムの概要

堀尾教諭と話し合い、社会科の単元と強く結び付けながら、ご自身が担当する総学「未来へ～わたしたちのふるさと 日吉東～」（図 1 参照）の中で、シビックプライド涵養につながる以下の狙いを達成できるようなプログラムにすることになった。

- 自らたてた課題について友達と協同して調べ、わかったことをわかりやすくまとめることができる。
- 仲間と協力して活動することができる。
- 他の地域と日吉東とのつながりを知り、地域の一員としての自覚をもつことができる。
- 先人への尊敬や感謝の気持ちを表現することができる。

2.3 教育プログラム全体の開発に関する課題と助言

筆者と堀尾教諭が事前に検討した、本教育プログラム開発時の課題と助言を、以下の 3 項目に整理された。

(1) 教科・教育面の課題（主に社会科）
- 教えるべき内容の整理が不安
- 教科書がない、資料を自作する必要がある
- 資料の入手先や信頼性に関する心配
- 児童の生活経験の差に対応する手立て
- 他校との整合性、一般のテストが解けるのか
- 保護者の理解が必要

(2) 実施・運営面の課題（主に、総学）
- 校外実習における児童の安全確保
- 地域人財の発掘（誰に話を聞くのか）
- 協力者との打合せの時間確保
- 学校行事や他の教科との時間調整

(3) 課題に対するアドバイス内容
- 景観論、土木史の専門家としての知見から解答
- まちづくりの実践者としての回答、情報提供
- 行政、地域住民とともに、授業全体を補助

これらのうち、(1) は一般的な課題であるが、(2) は小学校ごと、固有の課題であり、それに対して日吉東小学校が立地している熊本市南区のまちづくりの現状を理解した上で、筆者がアドバイスした内容を整理している。

2.4 教育プログラムづくりの振り返り（堀尾教諭）

総学のみならず、社会科（3・4 年生の学習内容（5）のウ）「郷土をひらく」の学習との関連を図って学習を進めた。総学で扱う「地域の文化財について調べる」という活動と並行させて、「地域を流れる三の井手について（焦点をあてて）調べる」という活動を社会科で 13 時間行った。社会科の学習の目標（地域の発展に尽くした先人の工夫や努力、地域の人々の生活の向上について考える）と総合的な学習の目標（先人への感謝の気持ちもち、地域の一員としての自覚をもつことができる）とが、相補完的に達成されるよう工夫した。

通常、熊本県の小学 4 年生は山都町の通潤橋を教材として扱うが、ここでは校区を流れる三の井手の学習に差し替え、三の井手が作られるに至った時代背景・自然条件、作り方、加藤清正・当時の農民たちの思い、その後の生活の変化などについて学習を行った。三年生の総学の時間に年間を通して行った野菜栽培の経験から、この地域が緑豊かな土地であることは知っていたが、本プログラムを通して実はそれは先人たちのいろいろな工夫や努力を受け継いで、今のこの校区があることなどを改めて知ることとなった。社会科で得たものは「知識」であったが、総合的な学習の時間での「体験」と重なることで、心情も育つのではないか、と考える。

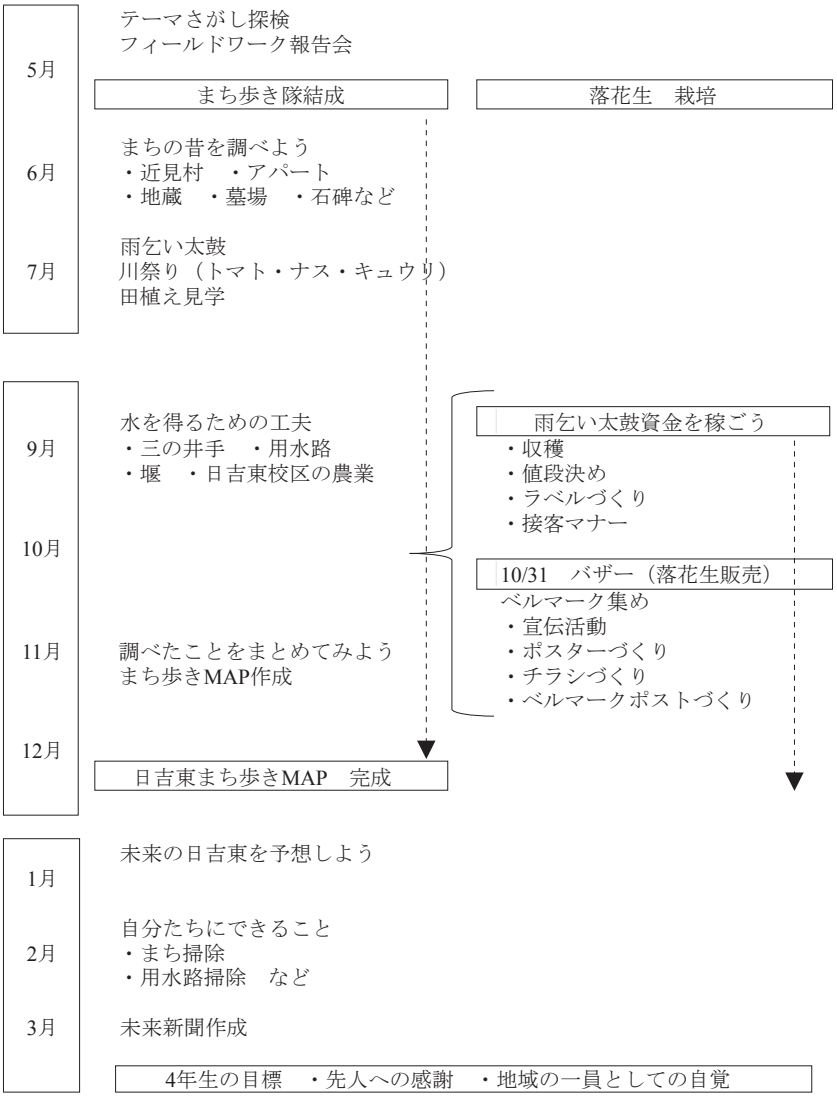

図 1：活動内容

3. まち探検（一学期の取り組み）

3.1 まち歩きの授業内容

日吉東小学校 4 年生 3 クラスが「まち探検」と称し、地域の謎解きのためのまち歩き調査（図 2、3 参照）を児童が行った。筆者は、大学で使用しているまち歩きの講義資料を、小学生用にアレンジして提供した。先生を交えた話し合いや地域住民の方々へのヒアリング調査などから、「地域の姿」、「三の井手（校区を流れる農業用水路）」、「お寺・お地蔵さん」、「雨乞い太鼓」などのテーマを設定していった。

3.2 まち歩き時の児童の疑問

筆者らが同行した 2014.6.5（木）14:00 ～ 15:30 の「校区のなぞときに出かけよう！」の際に、児童の問いを以下の通りに整理した。

（1）地域の姿、暮らし、農業について

- どうして家がふえてきているのか。
- ビニルハウスの中で何を育てているのか。
- どうして畑がたくさんあるのか。
- ビニルハウスはいくつあるのか。
- アパートやマンションは何軒あるのか。
- 花畑ではどのようにして水をやっているのか。
- なぜ花を植えてあるのか。
- 花畑はどこにあるのか。
- どんな花が植えてあるのか。
- アパートやマンションの広さ。
- 建物は何軒あるのか。

（2）三の井手について

- 用水路の水は、どこから流れてくるのか。
- 三の井手には、なぜその名前が付けられたのか。
- 小さな川なのに、なぜ名前がついているのか。
- 用水路はどこにつながっているのか。
- 用水路の水はどうして急にふえたり減ったりするのか。
- どうしてコケやわかめみたいなものが生えているのか。
- どうしていたるところに用水路があるのか。
- どうして家があるところに、用水路があるのか。

図 2：まち探検

図 3：インタビュー調査

- なぜ川などは、海につながっているのか。
- どういうことで役にたっているのか。

(3) お寺・お地蔵さんについて
- 赤いとびらの中は、どうなっているのか。
- 注連縄は、どのくらいの長さがあるのか。
- お墓には、何人の死んだ人がいるのか。
- 地蔵は、何のためにあるのか。
- 赤いとびらの中に入ってみたい。

(4) 雨乞い太鼓について
- どんな時に大太鼓を使うのか。
- 大太鼓の大きさ。何の皮でできているのか。
- なぜ公民館ができているのか。
- 公民館の中を見てみたい。
- ばちは何でできていて、昔はどうだったのか。
- 大太鼓をつくるのは、どこで作ってもらったのか。
- 太鼓の外側にある点々は、何でできているのか。
- 大太鼓と普通の太鼓は何が違うのか。
- 太鼓のなかは空なのか。
- 大太鼓はどんな音か。
- 大太鼓を見てみたい。たたいてみたい。

以上のような問いをまとめながら、地域を理解した。

4. まち歩きマップ（二学期の取り組み）

4.1 まち歩きマップづくり

4 年生 3 クラスで、二学期に入っても何度かまち探検を行い、最終的に 16 枚のまち歩きマップを製作した（図 4、

図 4：まち歩きマップの例（4 年 1 組 4 班）

図 5：2 組 5 班の地図

5 参照）。筆者は、すべてのマップに対してコメントを付けて返却した。

(1) 1 組 4 班「日吉東マップ」に対するコメント
- 小学校のまわりのようす（とちりよう）が、よくわかるので、よい地図ですね。
- 東バイパスの方には、大きなお店が多いようですね。3 号線の方と比べてみよう。

(2) 2 組 5 班「近見さんぽ」へのコメント
- たくさんの絵と、どのように「さんぽ」するのか、が描かれていて楽しいですね。
- 「三の井手」は、みなさんにとって、また農家の方々にとって、何の役にたちますか？

(3) 3 組 2 班「おじマップ」へのコメント
- マップの名前「おじマップ」がいい！ちいきのお地蔵さんを、ぜんぶ数えたいね。
- どのお地蔵さんが、ちいきの人に好かれていますか？

4.2 まち歩きマップの分析

「まち歩きマップは、ただの見どころマップではなく、まちのテーマを示す、まち歩きのためのマップである」

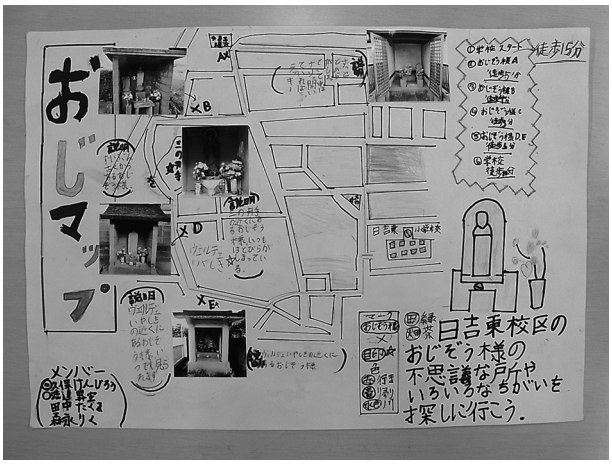

図 6：3 組 2 班の地図

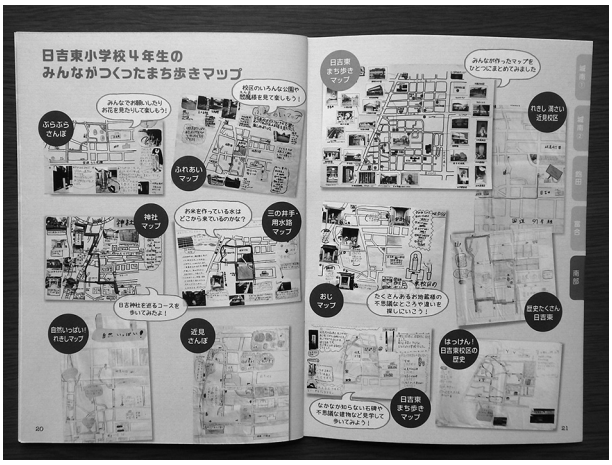

図 7：まち歩き手帖 Vol. 3 の 1 ページ

という講義内容に即して、児童が自班にてテーマを決め、それらを反映させたマップが 16 枚できた。これらは、テーマの重なりもなく、多様性が見られ、非常に有意義な演習内容であった。これらの成果は、まち歩きコースを公募していた熊本市南区作成の『まち歩き手帖 Vol. 3』(図 7) に収録された。

5. なかよし交流会（三学期の取り組み）

5.1 交流会の背景と概要

三学期には「未来の日吉東」について児童は考え、学級の総意として、未来に「子どもからお年寄りまでが集える交流施設がほしい」という意見にまとまった。これは事前のアンケートでも同様の意見であり、自分たちが望む未来の日吉東にするために、今自分たちにできることを考え、「まずは自分たちが地域の人となかよくなる」という答えが「交流会」となった。

交流会では、自己紹介を兼ねたアイスブレイク「じゃんけん列車」を行った後、地域住民の方と児童が混じり合い町内会ごとに 4 班に分かれて、地域の良い点〇、悪い点×を抽出し×を〇にする手法などを議論して、まとめを発表するワークショップ（図 8、9）を行った。

図 8：アイスブレイク

図 9：交流会での WS

(1) 1 町内～ 4 町内個別の特徴　の他、
(2) 1 町内～ 4 町内に通じて言えること　として以下の 3 項目が挙げられた。
◎地域の方が親切。協力してくださる。△交流できる場が少ない。△ごみ出しのルールが守られていない。
※あいさつや交通のルールについては、「できている」「できていない」の両方の意見が出ました。

5.2 交流会の感想

交流会の感想を、以下の通り 5 人分掲載した。

「自分がみんなから守られていることがわかりました。会の進め方など、いろいろな仕方をいっぱい知れて実行できるようになりました。楽しんでもらえたことで、ちょっと成長しました。【涼花】」

「話し合いでは、地域の人と同じことを考えていたので、地域の人とぼくたちは、考えていることが同じなんだなとおもいました。【康太郎】」

「最初は交流会をやるなんて、思ってもいませんでした。でもこの交流会をやることでもうすぐバラバラになってしまうこのクラスが、一つにまとまったので、みんなと協力してよかったと思います。それに地域の方とも仲良くなれました。【美咲】」

「ぼくは、絶対に交流施設があったらいいと思います。そのわけは、地域の人が全員優しかったし、おもしろかっ

たから、またこういう機会があったらいいなと思いました。【皓晟】」

「地域の人たちが事故をおそれていることやボランティア活動について考えて下さっていることがわかりました。「地域の人たちは、私たちを心配してくれているんだ」と思いました。【彩乃】」

6. シビックプライド涵養に関する考察

本章では、市民が地域社会に対してもつ自負と愛着をシビックプライドとして、各課題において小学生が身に付けるきっかけや、その過程について考察した。考察内容は、堀尾教諭（【堀尾】と記載）と筆者（【田中】と記載）の議論の結果を、共同研究者である伊藤、戸田両先生に確認する形で進めた。

6.1 まち探検

【田中】まち探検では、歴史、自然環境、生活・生業の3軸から、地域固有の本質的価値、言い換えると「地域らしさ」の本質を理解する文化的景観の考え方を通して、「れきし、しぜん、くらし」から目に見えるもの、見えないもの地域の様々なもの・ことを「知る」ことで、地域において「私」という存在を認識できたと考える。

【堀尾】児童は普段の生活の中で、自分の町内以外の校区を自分の足で歩くという経験が少なく、実は校区のことについて「知っているようで知らない」現状がある。まず、児童たちが、自分の足で歩いて情報を得て、これまで友達の話の中でだけ聞いていた「場所」や「こと」が、自分の経験と結びつくことで、「まち」が身近なものとして感じられるようになった。また地域の方々とふれあう中で、「自分たちはいつも校区の人に見守られている」、「受け入れられている」と理解できたようだ。「まち歩き」の中で、人と出会ったり、本物（実物）を見た時の心の動きにより、驚きや感動、尊敬などといった感性や情緒を育てられる側面は大きい。子どもの思いを育てるには、「現場」で「現物」と出会わせ、人との「対話」人と言葉を交わすことが重要である。

6.2 まち歩きマップ

【田中】マップづくりでは、自分たちで集めた情報を基に、テーマに即した地図を「つくる」というグループ作業をすることで、「私たち」が社会において果たす役割が理解できた。

【堀尾】マップにまとめるという具体的な目標があったので、意欲的に活動できた。描いて表現するためには、紙面と現地とを行きつ戻りつする必要性が出てくる。それが改めてまちを見直すきっかけになった。できあがったマップを学校のバザーのときに掲示し、地域の方々にも見てもらい、感想をもらうことで、地域の方々への親近感につながった。

6.3 なかよし交流会

【田中】交流会では地域コミュニティの他者と交流することで、地域社会における他者との関係性について理解できた。

【堀尾】学校では、地域の方々に見守られながら登下校や行事、学習を行っていることから、子どもたちの中には、ややもすると「してくれて当たり前」のような感覚がある。交流会の準備でも、自分たちが「遊んでもらう」という発想から抜け出すのに時間がかかった。町内ごとに分かれての話し合いでは、一つの「まち」について同じ土俵で、対等に話し合うという初めての経験をした。「対等」であるということが大事で、自分たちは大人に守ってもらっていることが当然であるとか、自分が住んでいるのは「家」に住んでいるのであって、「まち」に住んでいることに無関心・無頓着であるという感覚であったが、自分の目から見た「まち」を、自分の言葉で語ることによって「自分もまちに住む一人なんだ」という感覚を味わったと考えられる。子どもが普段生活していて「自分もまちに住む一人」と自覚することは、ほぼない。昔は異年齢の子ども集団の中や、地域の公役を大人とともに行うことなどを通して、実際に体を動かすことや場の雰囲気で自然に学んできたことかもしれないが、今は子ども会も大人が子どもを喜ばせるための会としてイベント化しているので、上記の子どもたちのように、大人から子どもへの一方通行の「受身」で関わっている。交流会をしたからといって「まちの一員」という自覚がすぐに育つわけではない。しかし、今回のように自分たちの今の立ち位置に気づくことを繰り返し経験し、「今度は自分たちが」と立ち上がったときの行動を通して、シビックプライドが醸成されるのではないかと考えられる。

7. おわりに

本研究では、小学校の地域学習において「まち歩き」を基盤とした地域学習プログラムが、シビックプライド涵養に関して果たした役割について、アクションリサーチとして参与観察し、そのメカニズムを考察した。

小学校地域学習は、社会との関わりを学びとる単元であり、シビックプライドの涵養と密接に結びついている。子どもたちが、ふるさとを離れる以前に、どんな環境、どんな社会で暮らしているのか認識しておくことは、暮らしに根ざした原風景の獲得に他ならない。まち歩きを核とした地域学習プログラムでは、児童が「地域社会」との結びつきを、クラスメイトとともにグループ学習を

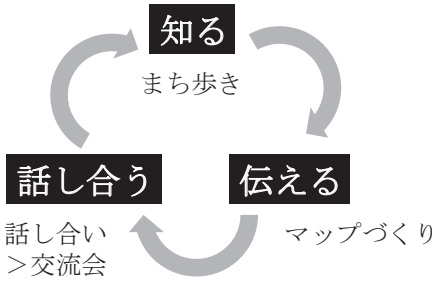

図 10：シビックプライド涵養のサイクル

行って理解していく過程が、シビックプライドの基盤形成として、その涵養に効果的であると考えられる。

本研究の成果として、図 10 に示すように、WS にてクラスメイトや地域住民とともに、地域らしさ（地域アイデンティティ）を「知る＞伝える＞話し合う」ことで、自分の身に起こったことのようにリアリティをもって考える、いわゆる「自分事化」して、物語として紡いで（協働して）いくプロセスが示すことができた。

謝辞

本研究では、熊本市立日吉東小学校校長先生以下教職員の皆様、そして一緒にまち歩きを行い、マップを作成してくれた平成 24 年度 4 年生の児童の皆さんにご協力頂きました。

また、本研究は科学技術研究費基盤研究（C）一般「異学問・学校・地域との協働によるシビックプライドを育む小学校社会科地域学習の開発」に関する研究事業の一環であり、共同研究者である鳴門教育大学伊藤直之先生、佐賀大学戸田順一郎先生にも、謝意を表します。

引用文献

茶谷幸治著（2012）．「まち歩き」をしかける コミュニティ・ツーリズムの手ほどき．学芸出版社.

神谷由紀子（2014）．フットパスによるまちづくり　地域の小径を楽しみながら歩く．水曜社.

唐木清志（2008）．子どもの社会参加と社会科教育　日本型サービスラーニングの思想．東洋館出版社.

美馬のゆり・山内祐平著（2005）．「未来の学び」をデザインする―空間・活動・共同体―．東京大学出版会.

文部科学省（2008）．小学校学習指導要領　社会.

シビックプライド研究会（2008）．シビックプライド都市のコミュニケーションをデザインする．宣伝会議.

シビックプライド研究会（2015）．シビックプライド 2（国内編）　都市と市民のかかわりをデザインする．宣伝会議.

山内祐平・森玲奈・安斎勇樹著（2013）．ワークショップデザイン 創ることで学ぶ．慶應義塾大学出版会.

Abstruct

Recently concerning with the regional revitalization and the local problem solution, “civic pride”, which was born in the United Kingdom in the 18th century, attracts attention on the sight of public space design and community development. Referring to practice of domestic and foreign variety of social studies education, our group research the significance and education method for cultivating the civic pride for applying new style regional education of elementary school. The Civic pride is defined as self-confidence and attachment for the hometown, and positive mindset for participation the improvement it. In this research, the role of the regional education program based on the town watching in the elementary school was observed as an action research, and its mechanism is clarified. Specifically, in the periods for social studies education and integrated study of the Hiyoshi-higashi elementary school’s fourth grader in Kumamoto City, the series of program such as the town exploration, map for town watching and exchange meeting, are practiced and inspected about education method and materials. As a result, the process, which students obtain the local identity as his own, and they cooperated for making the story about it by the workshop method was revealed. And, it is clarified that the process which students understand about local identity and the membership in the community is important for cultivating the civic pride.

（受稿：2016 年 4 月 7 日　受理：2016 年 5 月 18 日）